

P-025

中学・高校生の学校ストレスの実態

日下 虎太郎¹、橋本 創一²、三浦 巧也³、
秋山 千枝子⁴

¹ 目黒学院中学・高等学校

² 東京学芸大学特別支援教育・教育臨床サポートセンター

³ 東京農工大学

⁴ あきやま子どもクリニック

1. 問題と目的

高校生の学校ストレス研究は、嶋田ら(1994)をはじめとして、ここ30年間にさまざまな議論が進んできた。中でも、ストレスの側面からの検討では、比較的インパクトのある生活上の変化である「ライフイベント」が直接的に学校不適応を引き起こすものの、日常的に経験している比較的小さなストレス(デイリーハズルズ)の積み重ねの方が、子供のストレス反応に深い影響があるという研究結果が広く支持されるようになっており、このストレスは「学校ストレス」と呼ばれている。岡安ら(1992)は、学校ストレスとして「先生との関係」「友人関係」「学業」「部活動」「委員活動」「校則」「叱責」などを見出した。その後、ストレス反応との関連や主観的ストレスに関する研究(吉原・藤生, 2016)など、様々な広がりを見せている。

一方で、中高生を取り巻く環境はここ数年で急激に変化している。それに伴い、現代の中高生の抱える学校ストレスも変化している可能性が推測される。

そこで、本研究は現代の中高生の抱える学校ストレスを捉え直し、学校適応を支援する視座を得ることを目的として、中学生・高校生への質問紙調査を行う。

2. 方法

2022年4月～6月、楽天インサイトを用いたインターネット調査により、保護者と本人から同意の得られた中学生・高校生1,600名を対象に実施し、回答のすべてを分析対象とした(回収率100%)。なお本研究は東京農工大学倫理委員会の承認を得ている(承認番号220404-0403)。対象者に、「学校生活の中で感じるストレスのうち、最も影響の大きいと感じるもの」を自由記述で回答を求め、KJ法を援用した方法によりカテゴリーを抽出した。

3. 結果と考察

42項目の学校ストレスが抽出された。これらをストレスの源泉という観点で整理したところ、「学習」「教師」「友人」「他の人間関係」「環境」「自己」という6つのカテゴリーが得られた。また、「特にない」と回答した生徒は380名(23.8%)であった。得られた項目の中には、SNSに関連するストレスなど、先行研究では得られていない現代的な課題も含まれていた。今後は、学年毎の傾向や、吉原ら(2016)のような生徒の主観的な認知の観点から検討を進めることにより、現代の中高生の抱える学校ストレスをより立体的に把握して、支援に繋げていく方策を考えていく必要がある。

P-026

発達障害のある子どもの保護者支援に携わる専門職のキャリア発達に関する検討

田中 里実¹、橋本 創一²、佐野 昌子³、
小柳 菜穂³、佐藤 翔子³

¹ 東京都立大学

² 東京学芸大学

³ 東京学芸大学大学院

幼児期の知的・発達障害のある子どもの支援においては、特に保護者支援の重要性がいわれるが、同時に困難さも指摘される。その要因の一つとして、子どもの特性の理解や子どもに合った子育てを支援すること(発達ガイダンス)と、わが子の障害に対する辛さといった保護者の思いを理解し保護者を精神的に支えること(子育てカウンセリング)の両方の難しさが挙げられる。支援に携わる専門職がこの二つをどのように両立させ支援態度や価値を決定するのか、キャリア発達の観点やサポート要因も含め明らかにすることは、専門職のキャリア発達を支援する上で、ひいては保護者支援の質の向上に向けて重要な課題である。

これを踏まえて本研究では、幼児期の発達障害のある子どもの保護者支援に携わる専門職13人にインタビュー調査を行い、支援態度や価値を決定するプロセスについて検討した。得られた回答は逐語化し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を用いて分析した。なお、本調査は東京学芸大学の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(受付番号:550)。

その結果、支援態度・価値の形成プロセスとして【専門職としての自分を模索する】時期、【葛藤しながら保護者の心理的適応を重視する時期】、【曖昧性・不完全性を受け入れ保護者を支え続ける】時期をたどることが示された。発達ガイダンスと子育てカウンセリングの比重の見極めという観点から捉えると、自己注目が強く見極めに至らない段階を経て、子育てカウンセリングに比重を置いた態度・価値が形成されていき、葛藤を繰り返しながらも保護者に寄り添う経験を積むことで、保護者が主体的な選択ができるために今のような関わりが必要かという目的ベースの判断に変容していくことが考えられた。この経時的変化を見たときに、変化の軸は、①専門職の自己注目から保護者への注目へと変化する「視点」の軸、②“今”だけでなく“先”を見据えて支援を考えるようになる「時間」の軸、③保護者に伝える意識から保護者の主体性を下支える意識を持つようになる「アプローチ」の三軸から捉えることができると考えられた。またこのような態度・価値の形成のサポート因として、同僚からのサポート、自己省察の機会の重要性が示唆された。